



## 第13回演奏会曲目決定!

8/13(日)に行われた選曲会議で、以下の曲目に決定しました。

ブリテン : 歌劇「ピーター・グライムズ」より  
『4つの海の間奏曲』

シベリウス: 交響曲第5番

エルガー : 管弦楽のための独創主題による変奏曲  
『エニグマ(謎)』

なお、楽譜の配布日程はまだ未定です。  
選曲会議の詳細報告はまた別途。

(広報担当)

## 参加費をお早めに!(重要)

本番当日では多額の支払いが必要になります。まだの方は至急、お支払い下さい。

\*\*\*\*\*

支払い方法 1) 練習時に直接、会計: 金井(FI)まで  
2) 振込み

\* さくら銀行 麹町支店  
普通 7196197  
オーケストラディマンシュ

参加費全額 ¥35,000 -  
(学割: 1万円引きの¥25,000 -)

## 保育園での依頼演奏

保育園からの依頼演奏を行います。詳細は別途配布します。  
お問い合わせは、Hr 中村夫妻まで。

## 連載: FILM CLASSICS MANIACS

### その3: 映画音楽の歴史

さて、当初の予定よりもだいぶ少なくなってしまったこの連載、いよいよ映画音楽の歴史です。

ここでは、JWFC 会員でもあり、ご自身で作曲家コルンゴルトについての著作「コルンゴルトとその時代」(みすず書房刊)をものしていらっしゃる、早崎隆志さんのWeb サイト「映画音楽作曲家名鑑」(<http://www4.justnet.ne.jp/eden/FQ/>)に非常によくまとまっていますので、ご本人の許諾を得てご紹介させていただきます。

早崎氏によれば、映画音楽の歴史はおおまかに以下のようになります。

- \*1935-1954 シンフォニック・スコアの黄金時代
- \*1955-1976 シンフォニック・スコアの受難時代
- \*1977- 現在 シンフォニック・スコアの第2の黄金時代

更に細かく時代を分けると、以下のようになります(以下全文引用)

(1)サイレント時代(1895 ~ 1926).....各劇場ではピアニストや楽団が既成曲をごたませにした伴奏音楽をにぎやかに演奏していました。その中から、フランスを中心に良質の小編成管弦楽用オリジナル・スコアが生まれて来ます。

(2)ミュージカル映画全盛期(1927 ~ 1934).....トーキー革命によって映画はミュージカル一色に塗りつぶされます。また劇映画にアンダースコアを流すという考え方もなく、シンフォニック・スコアが成立するまでには今しばらく時間が必要でした。

(3)シンフォニック・スコアの確立(1935 ~ 1944).....1930年代にスタイナー、ニューマン、コルンゴルトという3大巨匠が現れ、いよいよ映画音楽のシンフォニック・スタイルの時代が開幕します。これから20年くらいがシンフォニック・スコア最

初の黄金時代となります。流麗な旋律、豊かな和声、鮮やかなオーケストレーション.....古き良きハリウッドをほうふつとさせるゴージャスなオーケストラ・サウンドはこの時代に生み出されるのです。

(4)「メイド・イン・アメリカ」スコアの成立(1945 ~ 1954).....コーブランドの影響を受けた若い世代(A. ノースやE. パンステインら)や、ローザ、ワックスマンら移民組の活躍で、ハリウッド映画音楽に新風が吹き込まれます。

(5)押し寄せるポップス化の波(1955 ~ 1966).....1950年代以降は映画各社の衰退の影響もあってシンフォニック・スコアはずたれ、代わってジャズやロックが映画音楽の中心を占めるようになります。こうした風潮に乗って一躍時代の寵児となったのが、マンシーニでした。

(6)オリジナル・スコアの受難時代(1967 ~ 1976).....ロックやポップス、クラシック既成曲などがサウンドトラックに氾濫し、オリジナル・スコアが見向きもされない時代です。しかしこの間にゴールドスミスとJ.ウィリアムズは着実に地歩を固めてゆきます。

(7)シンフォニック・スコアの復権(1977 ~ 現在).....J.ウィリアムズの『スター・ウォーズ』(1977)の登場は、映画音楽史上、特記すべき大事件でした。人々は伝統的なオーケストラ・サウンドの魅力を見直し、シンフォニック・スコアの第2の黄金時代が始まったのです。1980年代にはホーナー、プロートン、90年代にはニュートン・ハワード、マクニーリーら有能な新人も現れて、シンフォニック・スコアはますます楽しみな展開を見せてくれることでしょう。

(以上、「映画音楽作曲家名鑑」より)

\*\*\*\*\*

さてここで、現代におけるシンフォニック・スコアの第一人者としてのJ.ウィリアムズの作風から、彼が影響を受けた作曲家や作品を考えてみると、.....

エーリッヒ・E.コルンゴルト

11才にしてマーラーに「天才だ!」と言わしめた神童。歌劇で名を馳せたが、ナチスに追われるように渡米。ハリウッドのシンフォニック・スコアを確立したひとり。晩年の大作「交響曲嬰へ調」の第二楽章などは、十人中十人ともが「JWだ」と思う程、雰囲気こそっくりです。また、映画『Kings Row』の主題曲は、スター・ウォーズとスーパーマンを足して2で割ったような、、、(本当は逆なのですが)ハイフェッツのために書かれたヴァイオリン協奏曲は、自作の映画音楽からの主題をふんだんに用いた非常にロマンティックな協奏曲(奥村さんで演ってみたい!)

ウィリアム・ウォルトン

「王座の間」は明らかにウォルトンのふたつの戴冠行進曲(『王冠』『宝玉と杖』)に影響されたものでしょう。エルガーに代表される典型的イギリスマーチ風です。

ハワード・ハンソン

やや世代が上の吹奏楽経験者なら、『ディエス・ナタリス』や『コラルとアレグロ』などを演奏したことがあるのではないのでしょうか?『戦没者への賛歌』のコラル(特にホルンの内声の動き)はまさにハンソンの得意とした聖歌ふうの和声進行を感じさせます。

ミクロシュ・ローザ

ハンガリーから渡米したローザには純音楽も多く、『主題と変奏』はバーンスタインのデビューコンサートでの演目だった。スペクタクルの似合う作風で、『フラッグ・パレード』は明らかに『ベン・ハー』の「戦車の行進」を模倣したもの。

セルゲイ・プロコフィエフ

『運命の闘い』は、単一フレーズが執拗に繰り返されるオスティナートになっているが、これは『アレクサンドル・ネフスキー』の「氷上の闘い」に近い。

かように、その作風から考えても、JWの作品は後期ロマン派の流れを引く系統にあるといえるでしょう。もちろん、『未

知との遭遇』のように非常に現代音楽的手法を用いている作品もありますし、ファゴット協奏曲「5つの聖なる樹」ではケルト的テーマをミニマル的に使う場面もあり、単純に機能と声のみを使う作曲家ではありませんが、特にコルンゴルトを間に挟んだときに、マーラー、リヒャルト・シュトラウスから、コルンゴルト、そしてハリウッドへと続いた系譜がより明らかに見えてくるのです。

映画も歌劇などと同様、現代における総合芸術のひとつの形態であるにとらえるならば、20世紀の作曲家達が数多くの映画音楽を手掛けていることも、うなずけることではないでしょうか。そういった作曲家たちの中で有名な代表作は、

ショスタコーヴィチ

『女ひとり』『馬あぶ』『ベルリン陥落』『新バビロン』『ラムレット』『リア王』など多数

プロコフィエフ

『アレクサンドル・ネフスキー』『イワン雷帝』『キージェ中尉』ほか

ブリテン

『青少年のための管弦楽入門』(教育映画のサントラだったんです!)

ヴォーン=ウィリアムズ

『南極のスコット』(交響曲第7番になった)ほか

ウォルトン

『スピットファイア』『リチャード3世』『ヘンリー5世』『ラムレット』ほか

オネゲル

『鉄路の白薔薇』(パシフィック231の原形)『ナポレオン』『メルモ』『テンペスト』ほか

伊福部昭

『ゴジラ』シリーズ

武満徹

『乱』『利休』『砂の女』『ホセ・トーレス』など多数

早坂文雄

『羅生門』『七人の侍』

、、、など、他にも多くの作曲家、多くの作品があります。

こうしたことから、誤解をおそれずにいうならば、

モーツァルトやベートーヴェンの時代に映画というメディアがあったなら、おそらく彼等は多くの作品を映画の為に残しただろう

と考えると良いのではないのでしょうか。つまり、クラシックの作品か、映画のための作品か、というのは、あまり問題ではないと、筆者は考えます。

最近は、主題歌や挿入歌を集めた従来のサントラだけでなく、スコア版のサントラも出されるようになってきました。お気に入りの音楽を見つけてみるのも一興でしょう。

また、これで映画音楽全般に興味を持ったら、是非、早崎さんのサイト「映画音楽作曲家名鑑」を訪れてみて下さい。より詳細な歴史を紹介しています。



1 頁はやい編集後記

本番当日の配布になってしまいました。しかもレイアウトに失敗して、編集後記が最終頁より前という失態。むーん、わびです。

さあ、本番がんばったあとには、美味しいビールを飲んで、次回への英気を養いませう!!

(わし)

## 13 独断と偏見のDISK紹介 (ドヴォルジャーク編)

恒例の、広報担当の独断と偏見に満ちたDISK紹介です。とりたてて御紹介するまでもないといえばそんなんですが、ここでは広報ならではのものを御紹介します。本番後になってしまいますが、気になる方は聞いてみるのはいかがでしょうか。

<独断と偏見のワンポイント> : 個人的趣味により、“普通の”演奏は持っていません( ^ ^ ;

レナード・バーンスタイン/ニューヨーク・フィルハーモニック

19??録音 [CBS] SMK47547 (輸)

40代のレニーが熱い！一聴すると雑に感じる人もいるかもしれないが、この推進力・躍動感の特筆すべきだ。特に、第三楽章33小節目へ向けての追い込み方が素晴らしい。まさにオール・アメリカンといった風情。ところどころで、「やっちゃって」くれる個所もあるが(例えば終楽章冒頭部分のアゴーギク等)お薦めできる一枚。第一楽章でのバストロも、とても正しい。併録は、『謝肉祭』『スラヴ舞曲』と、スメタナの『モルダウ』。ちなみに、これが初めて買った『新世界より』でした。

ジェームス・レヴァイン/シュターツカペレ・ドレスデン

1994録音 [DG] 447 754-2 (輸)

録音が非常によい。ドレスデンの、クリスタルを思わせる硬質な響きが、緊密な構成美を感じさせる。反面、土俗的な風合いは無いに等しい。チェリビダッケとは全く対照的に、精神性はそれほど感じられないので、やや外面的か？そうはいても、カッコいいから許してしまう。ドレスデンにしては対向配置ではないのが悔やまれる。何故だ？！ジミー！

併録の8番も何やらカッコいい(特に第一楽章展開部での低弦の唸りに心を鷲掴みにされる)。つまり、ドヴォルジャークの音楽にスマートなカッコよさを求めたい方むけ。

ニコラウス・アーノンクール/ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団

1999録音 [TELDEC] 3984-25254-2 (輸)

古楽系の人だと思っていたら、いつのまにかロマン派作品でも巨匠となったアーノンクール。すっきり&さっぱり、端麗辛口というところ。はやめのテンポで、過剰なアゴーギクを極力排して、精緻といえるドヴォルジャークになっている。全体にトロンボーンのバランスが思ったよりも強い。特筆すべきバストロはバーンスタイン盤よりもさらに正しく、あまりに素晴らしすぎて感涙にむせぶ。ところどころで長めの音の処理が趣味に合わない(全体的に短めにする・音をあてて抜く傾向がある。古楽器的?)が、バストロを聴くだけで価値があるといえよう？！また、対向配置であることも非常にポイントが高い。併録は珍しい交響詩『水の精』。

カレル・アンチェル/チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

1961録音 [SPURAPHON] SU 1927-2 011 (輸)

いわゆるひとつの(かつての)定番、でしょうか。当時としてはスマートな演奏とされたいが、そこはやはりチェコ・フィル。金管の妙なるヴィブラートが時代とローカル性を感じさせる。ノスタルジアに浸りたい方向け。ご当地のくせにプラハ版を用いていないのは、やや不思議だが、プラハ版自体の参考資料のひとつがチェコ・フィル蔵のパート譜なのだから、“伝統”といえるのかも。併録は『自然の王国』、『オセロ』。

ヴァーツラフ・スメターチェク/プラハ放送交響楽団

1974録音 [PRAGA] PR250 016

こいつぁー凄い！かの評論家、宇野氏絶賛。プロオケなのか？むちゃくちゃ上手いアマオケって感じがするんですが、、、プロとは思えない熱さ。祖国の偉大な作曲家の偉大な作品を尊敬と愛情を込めて演奏しているという感じ。いやはや、これが「本場」というものなのか！とすれば日本人のなんと醒めていることよ。某Vc氏ではないが、やはりチェコへ行って聴くべき曲だ。

オトマール・スイトナー/シュターツカペレ・ベルリン

1961録音 [徳間ジャパン] TKCC-70287 (輸)

旧東独オケの硬質なサウンドで、男性的。ただ、テンポ的に非常に不思議な個所があるので、聴き終わった後に「？」が渦巻く。第二楽章結尾のコラールの音色には、身悶えするほど、しびれさせられる。これぞ東ドイツトロンボーンの響きだ！

セルジウ・チェリビダッケ/ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団

1961録音 [METEOR] MCD-034 (輸)

反則技の一品。チェリビダッケの手にかかると、どんな通俗的な曲も「なんて美しい！」に変貌する。バーンスタインと並んで、曲を完全に自分の世界に引き込んでしまう彼の独断場といえよう。特にその独自の世界を感じさせるのは、第二楽章中間部のテンポの驚愕すべき遅さ。全体として、マーラーのような(!)深さと孤独を感じさせる演奏。最後のデミヌエンドの余韻がなんともいえない哀愁を誘う。

なお、正規盤としては、リハーサル風景も含めたLDがリリース(以下で紹介)されている。

### < 番外編 : 映像 >

シャルル・デュトワ/モントリオール交響楽団

1999録画 (PRIVATE ARCHIVE)

来日公演。前中プロは、ラヴェルの『スペイン狂詩曲』と、諏訪内晶子のプロコフィエフVn協。ドヴォルジャークって、こんなにお洒落な曲だっけ？と錯覚させてくれる迷演。

ウォルフガング・サバリッシュ/フィラデルフィア管弦楽団

1999録画 (PRIVATE ARCHIVE)

99年来日時の横浜みなとみらいホールでの公演。

セルジウ・チェリビダッケ/ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団

19??録画 (PRIVATE ARCHIVE)

LDでリリースされているものと同内容の放送(WOWWOW)を録画。

クルト・マズア/ニューヨーク・フィルハーモニック

19??録画 (PRIVATE ARCHIVE)

NYP150周年の記念コンサートの衛星生中継を録画。他の演目は、メータの『ティル〜』、ブーレーズの『海』と、なんと指揮者なしでの『キャンディード』という、NYP歴代音楽監督によるガラ・コンサート。

聴いてみたい/見てみたい！という方は、広報まで。